



昭和39(1964)年に開催された東京五輪招致の功績に対し、フレッド・和田勇は同年、日本政府から勲四等瑞宝章を授与され、それから和田の存在は重きを増しました。

日本オリンピック委員会(JOC)はその後、国際オリンピック委員会(IOC)ローマ総会での1972年冬季五輪開催地決定に向け、札幌への招致活動に米国、カナダ、メキシコの支援を求めるよう、和田を頼ってきました。またも費用は全て自腹。和田は「得意」の中南米の票を固めたのは言うまでもなく、東京に続き、札幌にも五輪を呼んだ男となりました。和田は68年メキシコシティ

一五輪で、東京五輪開催支持のお返しに組織委員会の相談

フレッド・和田勇④

世界を股にかける日本人

があり、ロサンゼルスユースと結ぶことで利益が得られると判断。さらに横浜、大阪、神戸、名古屋など大規模港と次々と結びつき、ロサンゼルスへの貢献が日本の繁栄とつながっていききました。米国と日本の懸け橋となる



和田氏の功績をたたえようと6月から運行しているラッピングバス(御坊市提供)

和田の事業は、とどまることをしりません。67歳になった和田はロサンゼルスで人生最後の事業に取り組みました。和田自身が所有する土地と家を抵当に入れ、「今度は和田さんの夢のため、力になりたい」とこれまで世話になっていた日本のスポーツ選手や政界、財界からの寄付金をもとに、空き家を購入しました。移民として渡米し、戦中戦後の差別に耐え、苦勞して日系人社会を形作った一世や二世への恩返しとなる「敬老ナースィング・ホーム」などの福祉施設を建設。「この施設は米国全体の日系人社会のシンボルになると思います。そして三世、四世へと時代を超えて受け継がれていくんです」と話したといひます。

全てを成し遂げたかのように2001年2月、和田は93歳の生涯に静かに幕を閉じました。晩年の和田はよく「私の功績は妻のおかげだ」と話し、「ママ、世話になったなあ」と亡くなる3日前、家を出る前に妻に手を合わせたそうです。

大和魂を持つ彼は自分のことはいつも二の次で、思いやりと感謝を自然体で表現できる真の紳士。正子夫人も生前、「手や足や、もの言える、考える頭を持った人間というものに生まれて、何もしていないでつまらん一生を送るのも、もったいない。たった一粒のわれわれの一生を大事にして、有意義に使ってもらいたい」と思いを残しています。

私たちは今、夫妻が残した「日本の誇り」を、彼らが納得するように受け継いでいく必要があるのではないのでしょうか。今年6月から「御坊南海バス」(本社・御坊市)の路線バスでは、和田の顔写真とともに功績をたたえるラッピング車両も運行しています。この機会に夫妻の功績に触れてみてください。 (わかやまスポーツ伝承館 事務局長 畔取由佳) ◇ 次回は28日付で掲載予定です。